

西中国山地

佐保光俊

西中国山地は、私がもっぱら歩いている山域である。広島県内における盤主は恐羅漢山。その日は、被録続きの野田原ノ頭から恐羅漢山との鞍部、台所原までを歩いたのだが、地図に残る日付を見ると、そこを歩くのは二十二年ぶりであった。今回も、そのとき擬走した友人と一緒に。驚いたことに、友人はそのときテントを張った場所を覚えていて「あの晩、ここにテントを張りましたね。大きな獣が近づいてくる足音がしたけど、佐保さんはぐっすり眠っていましたね」と言われて、そのときの記憶が蘇った。

今回の山行は、遠く日本の南西海上にある台風の影響か、時折、強い風の吹く一日であった。

はや夏の過ぎやうとする山にゆく

どなたかが紫陽花入るる祠かな

林道の古きに蟬の生まれたる

県境にしたがひ青嶺歩きけり

この山にいくたび聞いて蟬の声

やや古き沙羅の落花を踏んでゆく

涼風は浅葱斑蝶の去りてより

ひぐらしに近づいてゆく下り道

山に斯くあたらしき蓼花さびた

この風は遠く台風あるゆゑか

《作品鑑賞》

村上正人

佐保光俊先生の作品は、日常を離れた山の世界に引き込む魅力がある。鋭敏な五感でその場に身を置き、自然と向き合う時間を過ごして詠んだ作品なのだ。

先生の作品は進化しつづけている。必要かつ十分な言葉の中に、時の推移軸を読みこみ、四次元的な表現に至っている。

県境にしたがひ青嶺歩きけり  
標高千計を超える広島県と島根県の県境を歩いた句である。「したがひ」という表現と詠嘆の「けり」によって久しぶりにこのルートを訪れた感が伝わる。

涼風は浅葱斑蝶の去りてより  
千回以上を渡る美しい蝶にしばし心を奪われる。ホームページの写真もこのとき撮られたのだろうか。蝶が風に飛んで飛び去ったあと、その風の心地よさが残った。

ひぐらしに近づいてゆく下り道  
壺の鳴く方へと下っていく。落ち着きのある壺の音が「下り道」ととても合っている。

この風は遠く台風あるゆゑか  
下山の時刻が近づくと頭だろうか、溼った風を感じた。先の蝶の句とは異なる風だ。風は時間帯や情景などをつぶさに表現する。そのような風を作者がとても大切にしていることが、この特別作品から伝わる。

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

佐保先生の山の句に、惹きつけられます。この特別作品では、晩夏から秋への季節の移り目を詠まれています。その山歩きにこれまでのこの山の記憶が重なり、落ち着きのある引締まった句に、深い余韻が生れています。

どなたかが紫陽花入るる祠かな  
小さな祠に新しい花が供えられている。大切にお世話をしている人がおられる。と安堵するのだ。

この山にいくたび聞いて蟬の声  
人は余りほどに愛着を増す、山もまた然り。この山でまたこの友と聞く蟬の声。それはささやかな喜びであるが、かけがえなく尊い。

涼風は浅葱斑蝶の去りてより  
千回を飛ぶという美しい蝶。一心に見つめ、蝶が去ってはじめて涼風に気づいた。

山に斯くあたらしき蓼花さびた  
さびたの花が咲いている。ふと見ると真新しい蓼。花の向うは彼岸なのか、不思議な印象の残る句である。

《作品鑑賞》

亜矢

「西中国山地」は、一句として難解な句はない。それは、十句全てが余計なものを削ぎ落とし、ありのままをありのままに詠んでいるからではないだろうか。作者の山への強い愛情が伝わってくるし、私もその場にいるような感覚を覚えた。

はや夏の過ぎやうとする山にゆく  
出発前だろうか。これから入るうとする山は、一步先の季節をいっている。「はや」と「やうとする」に、作者の移るいに対する一抹の寂しさを感ずる。

山に斯くあたらしき蓼花さびた  
花さびたは、白い額あじさいに似た小さな花。「斯く」という固い言葉で句を引き締め、ひらがなも多用して、さびたの花の可憐さも失っていない。誰の墓なのかわからないのに、悲しみが伝わってくる。